

専門医が教える ここまで分かった長引くコロナワクチン副作用の正体

3/27(木) ピンスバ



そのめまいやふらつきもコロナワクチンの副作用かも…… 写真/PhotoAC

「コロナ禍が発生してから5年が経過しました。感染状況は一段落したものの、ワクチンの“副作用”を訴える声が増えているんです」(医療ジャーナリスト)

新潟大学医学部名誉教授で、『コロナワクチン後の世界を生きる 薬害の現実と私たちができること』(花伝社)を上梓した岡田正彦氏が解説する。

「新たに開発されたレプリコンワクチンは、メディアで危険性が報じられたこともあり、実際に接種した人数は、さほど多くない。問題となっているのは、それ以前から存在する2つのmRNAワクチン全種です」

コロナ禍では、政府や自治体がワクチン接種を推奨したこともあり、国民の多くがモデルナ社やファイザー社のワクチンを接種した。それが今も深刻な副作用を引き起こしているというのだから、穏やかではない。

「副作用のメカニズムについては、いくつかの新たな理論があります。ワクチンを接種すると、スパイクタンパク質が体内で作られる。

ワクチンの開発者は、このスパイクタンパク質が重要だと主張するんですが、mRNAワクチンによって過剰に作られることで、問題が引き起こされるんです」(岡田氏=以下同)

体内の免疫細胞は、「異物がいる。ウイルスかもしれないぞ」と判断すると、さまざまな細胞に対して攻撃を仕掛けてくるという。

「例えば血液中の血小板が破壊されると、脳出血などが起きやすくなる。また、血圧を安定させる酵素が阻害され、高血圧や、立ったときに心拍数が大きく上がり、めまいやふらつきが起こる体位性頻脈症候群になることがあります」

■ ワクチン接種が開始された年からがん患者は増加の一途

怖いのは、それだけではない。がん患者もワクチン接種が開始された年から増え続けているという。

「がん細胞というのは、1日数千個単位で生じているんですが、多くの人が発病しないのは免疫力が備わっているからです」

コロナワクチン接種によって、免疫力が落ちたことと、がん患者の増加には相関関係があるという。

「卵巣がん、口腔・喉頭がん、白血病、すい臓がんの患者が増加しているのはデータ的にも明確。すい臓がんは、コロナ禍前から増加傾向にあったので断定できませんが、他のがんについては因果関係があるとしても、けっしておかしくはない数値になっています」

現状だと、検査法も治療法もないとのこと。ワクチン接種と病気の因果関係が証明できていないからだ。

「病院に行っても一向によくないし、医者に理解もしてもらえない。行政に駆け込んでも、たらい回しにされるだけ。寝たきりで仕事もできない……そういった悲痛な声が私のもとにも多数、寄せられています」

まともに社会生活を送れないほど、大きな副作用を抱えた人が少なからず存在する。このことは、もっと広く周知されるべきだろう。

「反ワクチン派というと、“ワクチン懐疑派”のアメリカのケネディ厚生長官のように感情的な背景があることが多い。

しかし、私は純粋なエビデンスに基づきながら情報発信しているだけ。最近はオカルト視されることもなくなってきました」

感染爆発は収束したが、コロナ禍は終わらない。